

平和旬間特集**奥村神父のメッセージに対する****皆さんからの感想**

日本カトリック平和旬間は、毎年8月6日から8月15日まで設けている、平和のために祈り、考え行動する10日間です。広島と長崎の被爆、そして終戦の日を心に刻む期間として定められました。

1981年の教皇ヨハネ・パウロ2世の訪日と広島における平和メッセージを受けて、カトリック中央協議会は、翌年「平和旬間」を制定しました。

女性の性への尊厳

●世の中を見渡すと、女性の性の尊厳が、男性に踏みにじられがちな世の中だと思えます。

女の子の性の尊厳も。

日本は、そうゆう、教育が全然されていらないので、そうゆうふうになると思います。

まず、それをなんとかしてほしいです。

(北地区・沼尻)

流配者が守り続けた尊厳

●今年は流配碑建立100周年を迎えます。この行事にあたり私は実行委員という大役を担うことになりました。しかし不思議なことに何かの働きによって導かれているのを感じるので。

大和郡山藩に連行された信徒のうち、10歳未満の子どもは18名。最年少は2歳。10代の若者26名。最高齢は78歳です。3年3ヶ月の流配中に生まれた赤子もいます。今回、流配碑建立100周年の記念行事に関わることで、知らなかったこと見えなかったことに触れ、「信徒の人権」を考える機会を通して、信仰に触れることができました。

今の時代、悲しみに寄り添う「グリーフケア」精神的な「スピリチュアルケア」が求められています。殉教という言葉は、どこか重苦しさがつきまといがちですが、命を差し込んで尽くした証しは、重苦しさや悲惨な出来事だけではなく、その先にある希望の光を見ることができま

す。悲嘆(グリーフ)はともすれば、悲しみと苦しみにとどまりがちですが「人権の根源は一人ひとりの人間が持つ尊厳にある」と示された言葉のとおり、流配者が最後まで守り続けた尊厳が、大和郡山からは一人の棄教者も出さずに、帰郷を果たしました。精神的にも肉体的にも、無抵抗で耐えて、守った人間の尊厳の、偉大さを学ぶことができました。(南地区・孫工)

主人を見送って思うこと

●私が一番心に残ったのは、「人間の尊厳は何よりも大切にされなければならぬ」ということです。一人ひとりの人が、仕事や社会、何らかの目的を達成するための手段とされてはならないという言葉が、とても心に響きました。

新型コロナウイルスが流行した当時、私は自治体職員として感染症対策の仕事に携わっていました。感染を広げないために必要な対策を進める一方で、行動制限やワクチン接種について、さまざまな相談を受け、迷ったり悩んだりすることもありま

した。また親としても、子どものワクチン接種については、学校生活や周りとの関係を考えて、簡単に決められることなく、葛藤したことを覚えています。そのような経験があったからこそ、「人間は何らかの権威の圧力によって手段とされてはならない」という言葉が、特に心に残りました。社会全体を守るための取り組みは必要ですが、そのような中でも、一人ひとりの思いや事情に目を向け、命と尊厳を大切にすることを忘れてはならないのだと思いました。

ここ10数年、仕事や家庭のことで教会から遠ざかっていましたが、主人を見送ったことをきっかけに、また教会に来るようになりました。今回のメッセージを通して、教会が大切にしているのは、一人ひとりの命や尊厳を大切にすることなのだと、改めて感じました。これから、信仰を改めて自分の生活の中心に置き、より深く信仰を育みながら、仕事や日々の生活の中でも、目の前にいる一人ひとりの思いに寄り添うことを忘れずに歩んでいきたいと思っています。

(匿名)

「平和ボケ」という言葉

●いま改めて、日本国憲法の前文を声を出して読み返しています。感激です。この憲法は、アメリカから押し付けられたもので自主憲法制定をという意見も耳にしますが、そのような議論は別として、万民が認める「素晴らしい、何にも代えがたい」ものと思います。まさに天上の「神の国」が地上に現れたものと思います。(少しオーバーですが)

第9条「戦争の放棄」の精神は世界に輝く灯です。「理想の空論」、「平和ボケ」という声に、あの中村哲さん(医師・アフガニスタンで難民医療に当たる傍ら灌漑事業途上で銃弾に倒れた)は次のように語っています。

「よく理想だけではやっていけない、ちゃんと現実を見なければ、と言いますが、それこそが、『平和ボケ』の最たるものです。それは、マンガや空想の世界でしか人の生死の実感を持ってない、想像力や理想を欠いた人の言うことです」と語り、武器を持ったら必ず人を傷つけ殺すことになりますと自分の実体験をもとに話されます。

このイラン戦争で、トランプ大統領から「あなたの国はあの憲法があるからね」と高市首相に派兵の要請はなかったと言われています。憲法第9条有り難いことです。

(西地区・阪井)

新型コロナウイルスに思う

●新型コロナウイルス感染症に関する3つの事がありました。3人ともワクチンは受けていませんが、それぞれに考えさせられることがあります。

知人の60代男性が発病し、奈良で3台位しかない医療器械を使える事が出来て、無事退院され、後遺症が残りましたが、なんとか元気になっておられます。

主人の兄は高齢で施設のデイサービスに通っていましたが、発病して入院2日目に亡くなりました。そして、ワクチンを最後まで自分の考えで、受けなかった親戚の60代女性が発病せず大丈夫でした。(匿名)

●人権とは、すべての人が生まれながらにして持っている「人間らしく自分らしく幸せに生きるための権

利」で性別、国籍、年齢、障害の有無などに関係なく誰に対しても平等に保障され他人に奪われることはありません、とあります。何に対しても自由なのか選択の自由があるが選択には結果責任があると思います。

コロナワクチンについての感想ですが、ワクチンの接種は強制ではなかったが、強制とのイメージで7回受けました。2回目の接種で発症し、5日間の自宅待機でした。5回目の接種で発症し、5日間の自宅待機でした。7回目の接種で発症したが医院に行かず、自主的に対応した。これに懲りて8回目以降は接種をやめて発症もなく現在に至っています。

今思えば選択の自由として初めから接種なしでよかったのか、人権とは選択の自由であり、私は結果的に行政には従順過ぎたのかと反省しています。大事には至らずよかったのかな？ (東地区・田伏)

●まず、『教会の社会教説綱要』の存在を初めて知りました。1回目に読んだ時は、難しすぎて、とても読みこなせないときらめかけましたが、具体例として、コロナに関す

る記述には大変興味を覚えました。特にコロナワクチン接種に関しては我が家でも意見が分かれ、ワクチン接種反対の医者の本を読み漁る親に對して、陰謀論者のレッテルを貼られてしまいました。年金生活者の私たち夫婦は、信念を貫きましたが、職場によつては、接種を強いられた子供もいました。神父様が書かれた事実は、ほとんど報道されることなく、ほぼすべてのメディアは連日、専門家による接種推進のお先棒をかついでいました。その陰で、ワクチン接種による被害者認定は、困難を極めていきます。かけがえのない家族を亡くした人々の闘いは続いているということです。

NIHBSで放映されたフランス制作のドキュメンタリー映画『AIの不都合な真実』の中で、低賃金の労働者や受刑者が過酷なデータアナライシオン(ラベリング)作業で精神を病むような状況で生産業が支えられてることを知りました。教会が示す人間の秩序の優位は、ここでも破壊されていると感じます。

(南地区・佐賀)